

<b>発表タイトル</b>	野生動物群に対する人為的介入を主題とした実践的研究
<b>発表者所属名</b>	地域文化学専攻
<b>発表者氏名</b>	東城 義則
<p>本報告は、都市公園とその周辺に棲む野生動物群の個体数増減現象を事例に、野生動物に対する人為的介入の具体相を明らかにする。そして人為的介入を主題にした、研究と教育の方向性について述べる。</p> <p>野生動物群に対する人為的介入とは、野生動物に対して人側が何らかの働きかけを行うことで、その生活に影響を与える行為を指している。具体的には動物に対する給餌、柵を用いた物理的な行動の管理、罠や銃を用いた狩猟による駆除があげられる。これらの行為は生態学の見地からは個体群を攪乱する行為として評価される一方で、近年では環境保全の見地から人の生活領域の維持や野生動物の個体数管理といった行為としても評価されている。そこで本報告は、持続的な人為的介入下にある奈良公園に生息するシカを事例に、動物群の個体数増減の要因について明らかにすることで、人為的介入を地域における研究（環境史・環境民俗学・環境学）や教育（環境教育）の主題として確立することを試みる。</p> <p>本報告では野生動物群の個体数増減の事例として、奈良公園における二ホンジカの個体数増減の現象を扱う。例えば、戦前における奈良公園におけるシカの個体数は 600～800 頭前後で推移しているが、アジア・太平洋戦争を経てシカの個体数は 79 頭まで減少する。この個体数の減少要因については、従来までは食料不足による密猟が原因として指摘されてきたが、当時の史料に即して再検討を行った結果、同時期のシカに対する給餌飼料の不足や鹿寄せの中断、そして密猟という複合的な要因によって減少したことが判明した [東城 2015]。このように動物群の個体数増減について、人為的介入の具体相を明らかにすることで、個体数の増減要因や個体の死亡要因を把握することが可能となる。また介入の強化と介入の弱体化は生態・文化・社会の各領域に影響を与えることから、個体群の生息環境や地域社会の生活を踏まえたうえで、その影響を考慮することが求められる。</p> <p>人為的介入を主題とする研究と教育は、実際に生じた人為的介入の手法や程度が地域や時代によって多様であることから、まずは双方において持続的に実施可能な研究や教育の方法を確立させる必要がある。特に研究を通しては地域特有の課題を言語化することで新たな知識の生産を図り、教育においては多くの人びとが産出された新たな知識を学び吟味し活用することの可能な双方向の学びの設計を行う必要がある。人為的介入を主題とした研究と教育は、現実の新たな問題に気づき解決する指向性をもつことから、地域社会を舞台にした野生動物とのかかわり方や人と動物との共生社会のあり方、動物の存在を問い直す実践的教育プログラムの構築に寄与することが成果として期待される。</p> <p>【参考文献】  東城義則 2015 「都市公園とその周辺における野生動物群の行動管理—奈良公園における鹿寄せの成立—」『京都民俗』33（印刷中）</p>	